本著作物の著作権は心理学評論刊行会に帰属します。ご使用にあたっては著作権法に従ってください。
引用情報：新谷優(2020). 助け合いの文化心理学. 心理学評論，63(3), 329-345.

Japanese Psychological Review
2020, Vol. 63, No. 3, 329–345

助け合いの文化心理学

新　谷　　優
法政大学

The cultural psychology of helping

Yu NIIYA
Hosei University

Although helping and cooperation are found in every culture, they are subject to many sociocultural influences. This review shows how cultures vary in the occurrence of prosocial behaviors, in the likelihood of asking and receiving help, and in the factors that promote or prevent helping. Independent and interdependent cultures differ in how much people offer help to ingroup members versus outgroup members, how much people seek help, and the relationship and self-worth concerns they have about receiving help. In this regard, differences also exist, depending on whether a particular culture follows a person-centric or a normative-contextual model of help. Future research should expand its scope by examining helping that does not involve apparent behaviors and that is invisible to the recipient. Future research should also consider the interchangeability of the provider and the recipient to better reflect the complexity of helping behaviors that seem more prevalent in interdependent cultures.

Key words: interdependent culture, independent culture, prosocial behavior, helping, cooperation, amae
キーワード：相互協調的文化，相互独立的文化，向社会的行動，援助，協力，甘え

1. はじめに

他者を思いやって起こす様々な行動は，複雑な心理的プロセスの結果である。人は援助を決断するにあたり次のような問いに直面する。その人は助けを必要とし，希望しているのか。どのような援助を必要としているのか。自分にはその求められた援助を遂行する能力があるのか。自分よりも的確に援助を遂行できる人がいるとしたら，自分が余計な手を出すことは，本来受けられたはずの援助を妨害することになるのではないか。その人に手を差し伸べたとして，その人は，世間は，社会は自分の行動を援助行動とみなすだろうか，それともお節介だと評すだろうか。これらの問いからも見られるように，援助行動そのものは単純であったとしても，その行動の背景には複雑な認知プロセスが存在する。そのために，援助行動とその要因及び効果は社会的・文化的背景の影響を受ける。本稿ではまず，助け合い行動の文化差をレビューし，集団主義的・相互協調的な文化の方が向社会的行動が多く見られるという知見と，個人主義的・相互独立的な文化の方がより向社会的行動が多いという知見の調和を試みる。次に，他者に援助やサポートを求め，受けることの文化差について論じる。さらに，援助行動を促す要因の文化差について考察し，文化心理学の視点を取り入れた援助行動の研究の展望を示す。

1.1　助け合いとは

本稿で扱う助け合い行動の範疇をまず明らかにしておきたい。「助け合い」は社会心理学では様々な専門用語に置き換えることができる。その最も広義なものは向社会的行動（prosocial behavior）であり，その中には援助行動（helping behavior），利他または愛他主義（altruism），ソーシャルサポート（social support），協力（cooperation），ボランティア・社会奉仕・慈善活動（volunteerism; charitable behaviors）などが含まれる。

向社会的行動とは，他者の利益になる行動と定義される（Dovidio et al., 2006）。ただし，Dovidio et al.（2006）は，一つの行動が向社会的であるかの判断は，その時代の社会および政治制度による

としている。たとえば1930年代のドイツでは，不審者を警察に通報することは向社会的行動と見なされていた。しかし，通報された「不審者」の多くはユダヤ人，同性愛者，ジプシーなどであり，罪もなく収容所に送られ処刑されたことが明らかになった現代から見ると，通報は向社会行動とは言えない。さらに，同時代であっても，ある集団の価値観からすれば向社会的行動とされるものが，他の集団からすれば無益な行動，場合によっては反社会的行動とみなされることもある。どのような行動が向社会的行動であるかは，それぞれの時代・文化・社会に依存することから，向社会的行動をその文化的背景から切り離して議論することはできない。

向社会的行動はさらに協力（cooperation），援助行動（helping behavior），利他または愛他主義（altruism），の三つに分類することができる（Dovidio et al., 2006）。協力は複数の人々が互いの行動を調整しながら，同一の目標を達成するためにとる行動のことを指す。援助行動は，実体のある報酬を期待せずに，他者に利益やウェルビーイングの向上をもたらそうとする意図的な行動と定義される（Nadler, 2020）。McGuire（1994）の援助行動の分類によると，日常的な些細な手助け（友人にペンを貸すなど），実質的な援助（友人の引っ越しを手伝うなど），情緒的な援助（友人の悩みごとを聞くなど），緊急事態での援助（事故現場で怪我人に手を貸すなど）は全て援助行動である。ボランティア活動や寄付も援助行動に含まれる（Aydinli, Bender, & Chasiotis, 2013）。他者からの感謝や自尊心の高揚，返報性を期待してこれらの行動に至ることもあるが，これらは実体のある報酬ではないため，援助行動と呼べる。さらに「援助者に利益や返報の期待がない」という条件を加えると，援助行動は愛他行動となる（Batson & Shaw, 1991）。本稿での「助け合い」は，向社会的行動の中でも文化差が主に議論されてきた協力と援助行動を中心とする。

1.2　文化の枠組み

協力や援助行動の文化差を扱う研究は，個人主義・集団主義，または相互独立的自己観・相互協調的自己観に特徴づけられる文化を対比させて論じるものが多い。個人主義的な文化では，個人は集団との関わり合いが薄く，個人の目標を達成することが重要とされる。集団主義的な文化では個人は集団に対して義務があり，集団の目標を優先させる（Hofstede, 1991；Triandis, 1995）。個人主義・集団主義が文化の様相を表す次元であるのに対し，相互独立的自己観・相互協調的自己観は，人が自己を他者との関わり合いの中でどのように理解しているかを表す。相互協調的自己観が主流な文化では，人は他者との関係性の中で存在するものであるという人間観に基づき，周りの人や社会からの役割や期待に応じた行動をとる（Markus & Kitayama, 1991, 2010；増田・山岸，2010）。これに対し，相互独立的な自己観が主流な文化では，人はほかの人や周りの物事とは区別されて独立に存在するという人間観に基づき，自分の性格，能力，才能，動機などの内的な性質に応じた行動をとる（Markus & Kitayama, 1991, 2010；増田・山岸，2010）。個人主義・集団主義は文化間の差異を説明する変数として，比較文化心理学の研究で主に用いられるのに対し，自己観は個人の行動や思考がどのように社会の在り方を形成し，また社会が個人の行動や思考をどのように形成するかを明らかにしようとする文化心理学の分野で用いられている。本来は区別されるべき概念であるが，東アジア文化圏は集団主義的かつ相互協調的自己観が主流であり，欧米諸国を代表とする西洋の文化圏が個人主義的かつ相互独立的自己観が主流であり，向社会的行動の実証研究においてはこれらの文化圏を比較したものが多いことから，本稿ではこれらをまとめて「相互協調的な文化」「相互独立的な文化」とする。

2.　人を助けることの文化差

2.1　向社会的行動の文化普遍性

向社会的行動はどの文化においても普遍的に見られる。他者の苦しみに共感し，他者のウェルビーイングを高めることを目的とした行動は人間だけでなく，サルなどの動物にも見られる（Preston & de Waal, 2002）。また，ヒトは利他的な行動をとるための生物学的な基盤があり（MacDonald, 1984），他者の苦しみを目撃すると，その苦しみを取り除きたいという慈悲や思いやり感情（compassion）が生じるよう進化してきた

（Goetz, Keltner, & Simon-Thomas, 2010）。さらには自分の利益よりも他者に利益をもたらすことを主目的とした共感に基づく愛他行動も普遍であるとされている（Batson & Shaw, 1991）。

人は血縁関係のない他者とも互いに協力するよう社会を進化させてきた（Boyd & Richerson, 2009）。向社会的行動を取ることが個人にも利益をもたらし，向社会的行動を取らないことが他者からの報復や処罰をもたらすようなシステムが構築され，現代のような大規模な社会が形成されるに至った。Henrich を代表とする研究チームは，社会が市場に取り込まれている程度やコミュニティの大きさによって，向社会的行動の出現率が異なることを独裁者ゲームや最後通告ゲームを世界多数の地域で行い明らかにした（Henrich et al., 2001, 2004, 2005；まとめは Feygina & Henry, 2015 を参照）。同時に，程度の差はあるものの，どの文化においても人は自己の資源を他者に分配することから，向社会的行動はどの社会にも存在することも明らかにした。独裁者ゲームや最後通告ゲームでは，実験参加者は通常，見知らぬ別の参加者とペアになり，与えられた金額のうち好きな額を相手に分け与えることができる。受け手は独裁者ゲームでは与えられた額を受け入れるしかないのに対し，最後通告ゲームでは受け取りを拒否することができる。最後通告ゲームで受け手が分配された額を拒否すると，分配者も受け手も報酬がもらえないため，受け手は自分の報酬を減らすというコストを支払ってでも相手に罰を与え，協力を促すことができる。Feygina and Henry（2015）によると，独裁者ゲームでの分配率は平均で 20～30% ほどで，最後通告ゲームは 40～50% ほどである。最後通告ゲームでは，20% の分配を提示された受け手の約半数はこれを拒否するため，独裁者ゲームよりも分配率が高くなる。アメリカ，日本，イスラエル，ユーゴスラビアの参加者に最後通告ゲームを同じ相手と 10 回行わせた実験では，初回に半々の分配を行った人はどの国においても 25% 以上いた（Roth et al., 1991）。10 回分の結果をまとめて見ると，アメリカとユーゴスラビアでは 50% の分配が最も多く，イスラエルと日本では 40% の分配が最も多かった。Roth et al.（1991）は日本で分配率が低かったのは，受け手の拒否率が低かったためであると考察している。分配率に文化差が見られるものの，どの国でも折半またはそれに近い分配がなされていることは興味深い。経済的により貧しいとされるインドネシアでも，人々は 40～43% の資源を相手に分配し，元となる資源が 40 倍になってもその数値は変わらないことが報告されている（Cameron, 1999）。アフリカ・南アメリカ・オセアニアに点在する 15 の小規模社会でも，分配の平均は 26～58% であった（Henrich et al., 2005）。Feygina and Henry（2015）の示した 40～50% よりも幅はあるものの，協力はどの社会においても存在することを示す知見である。

2.2　向社会的行動は相互協調的な文化に多いという知見

向社会的行動はどの文化でも見られるものの，その程度は文化によって異なる。向社会的行動の文化差をレビューした Feygina and Henry（2015）は，相互協調的な文化の方が相互独立的な文化より向社会的行動が多いとする知見を紹介している。たとえばイギリス人は最後通告ゲームにおいて，自分の取り分を相手よりも多くしようとする傾向があるのに対し，中国系マレーシア人は平等の分配をする傾向が強いことが報告されている（Chuah et al., 2009）。限りある自然資源を過剰利用しないよう互いが協力して利用を抑制する必要がある状況（コモンズ・ジレンマ）では，日本人の方がアメリカ人よりも「他者も協力的である」という期待が強く，過剰な利用を控えるという報告がある（Wade-Benzoni et al., 2002）。Hayashi et al.（1999）は，日本人とアメリカ人をそれぞれペアに割り当て，囚人ジレンマゲームをさせた。プレーヤーは実験者から 500 円を受け，その 500 円をそのまま自分のものにするか，相手に与えるかを選択するが，この時，双方が 500 円を相手に与える選択をすると，両者とも 1000 円ずつ手にすることができるとした。結果，日本人の方がアメリカ人よりも相手に 500 円を与える（相手に協力する）傾向があり，この文化差は自分が相手よりも先に決断をするという条件において特に顕著であった。日本人はアメリカ人よりも，自分が協力することで相手の協力行動を引き出すことができると考えていることが伺える。交渉場面においても，自分の行動の説明義務が生じると，相互協調

的な傾向の強い人ほど相手の提案に譲歩することが報告されている（Gelfand & Realo, 1999）。カナダ・中国・香港で行った公共財ゲームを用いた実験では，匿名の条件ではどの国でも協力率が同程度に低かったものの，個人が特定される条件では，中国人と香港人の方がカナダ人よりも協力的であった（Kachelmeier & Shehata, 1997）。

ビジネスの分野では，相互協調的な傾向が強いアメリカ人ほど自分の職務の範囲外であっても同僚や後輩の仕事を手伝うといった組織市民行動（Organizational Citizenship Behavior）に従事することが確認されている（Moorman & Blakely, 1995）。アメリカの住宅協同組合の組合員を対象にした調査では，相互協調性は半年後の援助行動を予測していた（Dyne et al., 2000）。

相関研究以外にも，相互協調的・独立的な文化をプライミング操作して，文化の効果を検証した研究がある。個人主義・集団主義をプライミングした研究のメタ分析を行ったOyserman and Lee（2008）によると，集団主義は向社会的な志向や他者に対する責任感，社会的感受性を高める。香港人は，アメリカの文化をプライミングされた時よりも，中国の文化をプライミングされた時の方が，囚人ジレンマゲームで自己の属する集団に対して協力的になった（Wong & Hong, 2005）。オランダ人も，相互協調的自己観をプライミングされた学生の方が，相互独立的な自己観をプライミングされた学生よりも，相手により多くの金銭を分配することが報告されている（Utz, 2004）。

2.3　向社会的行動は相互独立的な文化に多いという知見

相互協調的な文化では，相互独立的な文化よりも向社会的行動が多く見られるという知見がある一方，一貫した文化差が見られないとする知見や，反対に相互独立的な文化の方により多くの向社会的行動が見られるとする知見もある。アメリカ人の方が日本人よりも見知らぬ他者を含めた他者全般に対する信頼が高い（Yamagishi, 1988；Yamagishi & Yamagishi, 1994）。前述のHayashi et al.（1999）が行った囚人ジレンマゲームでは，相手が先に決断をし，それが協力か否かわからない状況ではアメリカ人の方が日本人よりも協力率が高かった。

Charity Aid Foundation（CAF）は十年以上にわたり毎年，世界140以上の国々からそれぞれランダムに抽出された1000人を対象に，過去一カ月のうちに（1）見知らぬ他者を助けたことがあるか，（2）何かの団体にボランティアとして時間を提供したか，（3）慈善事業などに寄付をしたかをたずね，「したことがある」と回答した者のパーセンテージを思いやり指数（World Giving Index）とし，世界ランキングを発表している。2009年から2018年までの10年分のデータをまとめた報告では，上位10か国のうち7か国は相互独立的であるとされる欧米文化圏（アメリカ，ニュージーランド，オーストラリア，アイルランド，カナダ，イギリス，オランダ）であり，相互協調的な文化圏は3か国に留まる（ミャンマー，スリランカ，インドネシア）。日本は総合ランキングで126か国中107位，見知らぬ他者に対する援助に関しては最下位であった。Smith（2015）がCAFの2013年のデータを分析したところ，内集団びいき（自己の属さない外集団よりも自己の属する内集団により多くの資源を分配しようとする傾向）と不確実性回避（不確かで未知な状況に脅威を感じる傾向）が顕著な国ほど，思いやり指数は低かった。Levine, Norenzayan, and Philbrick（2001）は，自己報告ではなく，他者の落としたペンを拾う，足を怪我した人が落とした書類を拾う，目の不自由な人が車道を渡るのを手伝うといった実際の援助行動の頻度を世界23カ国の大都市において測定した。専門家が評定した各国の相互協調的な度合いと援助行動の頻度には相関が見られなかったが，後にKnafo, Schwartz, and Levine（2009）が行った研究では，個人がソーシャルネットワークに組み込まれている度合いが高い国ほど（つまり相互協調的な文化であるほど），援助行動が少ないことが報告されている。

また，日本人とアメリカ人の成人に，見知らぬ他者に対して援助行動（例えば満員電車の中で妊婦のように見える女性に席を譲る，道端でしゃがみこんでいる病人らしき人に声をかける）をとる可能性を尋ねた研究（Niiya, Handron, & Markus, in prep）では，アメリカ人の方が日本人よりも援助を申し出る傾向が見られ，この文化差は援助のニーズが最も不確かな状況（女性が妊婦である確率や，しゃがみこんでいる人が病人である確率が

10%であると明示された状況）で最も顕著であった。見知らぬ他者の援助のニーズが不確かな状況を示したシナリオ（前を歩いている人が躓いて転んだ，飛行機の頭上の荷物棚に荷物を入れられない人がいる）を提示した場合も，アメリカ人の方が日本人よりも援助を申し出る傾向が強かった。

相互独立的な文化ほど向社会的行動が多いという知見は，アメリカ国内の州ごとの相互独立性の度合とボランティア活動と寄付行動を調べた研究でも確認できる（Kemmelmeier, Jambor, & Letner, 2006）。宗教団体のためのボランティア活動と寄付行動には相互独立性との相関が見られなかったものの，非宗教団体におけるボランティア活動と寄付活動は相互独立的な文化をもつ州ほど多かった。アメリカの各州と世界42か国からのデータをメタ分析したAllik and Realo（2004）も，相互独立的な文化的傾向が強い州や国ほど対人的なつながりが強く，市民活動に従事することが報告されている。

2.4　矛盾をどう理解するか

向社会的行動は相互協調的な文化の方が多いという知見と相互独立的な文化の方が多いという知見が混在するが，「どちらの文化の方がより向社会的か」という問いの立て方にそもそも問題がある可能性がある。向社会的行動が複雑な動機や認知過程の結果であるとすれば，「どちらの文化が」という文化の主効果ではなく，「どのような条件で文化差が生じるのか」という文化と状況の交互作用を検討すべきであろう。

相互独立的な文化よりも相互協調的な文化において向社会的行動が多く見られるのは，相手との関係性が持続する状況である。先述のGelfand and Realo（1999）の研究で相互協調的な傾向の強い人が交渉場面で相手に譲歩したのは，自分の行動に説明義務が生じたとき，つまり自分が向社会的な人間かどうかを他者に評価される可能性のある状況であった。Kachelmeier and Shehata（1997）の公共財ゲームを用いた実験でも，中国人と香港人がカナダ人よりも協力的になったのは，個人の匿名性が低い状況であった。Hayashi et al.（1999）の囚人ジレンマゲームの実験では，日本人は自分の選択した行動が相手に伝わることが明らかな条件で最も協力的であった。組織市民行動を扱った研究（Moorman & Blakely, 1995）や住宅共同組合員の援助行動を調べた調査（Dyne et al., 2000）では，向社会的行動の相手は明らかに今後も友好な関係性を持続する必要のある内集団成員である。また，自然資源の摂取を控える程度を協力行動の指標として扱った研究（Wade-Benzoni et al., 2002）でも，相手は同業者という設定であり，関係性が持続するということが暗示されていた。内集団びいきが顕著な国ほど思いやり指数が低いという先述のSmith（2015）の報告でも，思いやり指数が見知らぬ他者に対する援助や，慈善事業への寄付など外集団に向けた行動を反映していたために，相互協調的な文化では向社会的行動が少ないという結論に至ったと言える。

内集団と外集団に向けられる向社会的行動を直接比較した研究もある。たとえば中国人は内集団に対しては，貢献度の少ない相手に対しても平等に報酬を分配するのに対し，外集団に対しては貢献度の少ない相手には報酬を少なく分配する（Leung & Bond, 1984）。また，中国の文化をプライミングされた香港人は，アメリカの文化をプライミングされた香港人よりも協力的になるが，それは相手が友人である場合でのみ見られ，相手が見知らぬ他者である場合はプライミング条件による差は見られなかった（Wong & Hong, 2005）。アメリカ，中国，韓国，トルコ，日本の中学生と高校生を対象に向社会的行動を調べた研究でも，知人に対する援助は中国と韓国の方がアメリカよりも高く，日本はアメリカと同程度であったのに対し，見知らぬ他者に対する援助はアメリカの方が日本・中国・韓国よりも優位に高かった（松井・中里・石井，1998）。相互協調的な文化の人々は，向社会的行動の対象者と今後も友好的な関係を維持する必要があるかどうかによって行動を変化させるために，相互協調的な文化の方が向社会的行動が多いという知見とそうでないという知見が混在していると考えられる。

なお，内集団と外集団のバウンダリーが文化によって異なることにも留意する必要がある。Buchan, Croson, and Dawes（2002）は相互独立的な傾向を持つ人ほど，実験で作られた即席の内集団の成員であっても信頼し，協力する傾向があるのに対し，相互協調的な傾向を持つ人ほど，即席の内集団に対しては外集団と同じように信頼しない

ことを報告している。また，日本人は外集団成員であっても共通の知り合いがいる可能性がある場合は，内集団成員と同じだけ信頼するのに対し，アメリカ人は共通の知り合いがいる可能性があっても，外集団の成員は信頼しない（Yuki et al., 2005）。相互独立的な文化では一般的信頼が高く，見知らぬ他者も簡単に内集団になりうるために向社会的行動の対象となるが，相互協調的な文化では内集団成員および内集団になりうる可能性のある他者のみが向社会的行動の対象となる。

3. 人に助けられることの文化差

援助行動は行為者が自ら取ることもあれば，援助を必要とする人の要請に応える形で生じることもある。ここでは援助要請の文化差についてレビューし，さらに援助が被援助者に与える影響の文化差について論じる。

3.1　援助を求めることの文化差

アジア人，およびアジア系アメリカ人はヨーロッパ系アメリカ人よりも援助を求めることに抵抗があることが知られている（まとめはKim, Sherman, & Taylor, 2008を参照）。韓国とアメリカの大学生にストレスの軽減方法について自由記述で回答を求めた研究（Taylor et al., 2004）ではヨーロッパ系アメリカ人の6割近くがソーシャルサポートを挙げていたのに対し，韓国人では4割弱にとどまっていた。アメリカ在住のアジア人およびアジア系アメリカ人は，ヨーロッパ系アメリカ人に比べ，ソーシャルサポートは役に立たないと感じており，ソーシャルサポートを求めると関係性を悪化させてしまうという懸念があることも明らかにされている（Kim et al., 2006；Taylor et al., 2004）。アジア系の人々が援助を求めない理由として，その他にも，求めなくても援助が得られるという信念や自分の問題は自分で解決すべきだという信念も挙げられるが，これらの信念はソーシャルサポートの文化差を説明するには至らなかった（Kim et al., 2006）。

求めるサポートの種類もヨーロッパ系アメリカ人とアジア系の人々では異なる。ソーシャルサポートの種類には，明示的なものと暗黙的なものがある。明示的なサポートはアドバイスをする，手を貸す，辛い気持ちを聞くなどであり，ソーシャルサポートの研究で扱うのは大概明示的なサポートである。一方，暗黙的なサポートは，被援助者が自分の抱えている悩みや問題を相手に開示することなく，他者と時間や空間を共にすることで情緒的なサポートを得る場合を指す（Taylor et al., 2007）。例えば職場でストレスを抱えていても，それを打ち明けずに家族と楽しいひと時を過ごすことで元気を回復するようなケースは暗黙的なサポートと言える。ヨーロッパ系アメリカ人は明示的なサポートを求める傾向が日本人よりも強いのに対し，日本人は暗黙的なサポートを求める傾向がヨーロッパ系アメリカ人よりも強かった（Ishii et al., 2017）。この文化差の理由として，Ishii et al.（2017）はアメリカでは日本よりも自己の行動によって他者を含めた周りの環境に影響を与えようとする傾向が強く，そのために自尊心を回復するための明示的なサポートを求める傾向も強いことを示した。一方，日本ではアメリカよりも自己の行動を他者に合わせようとする傾向が強く，そのために関係性の悪化を回避できる暗黙的なサポートを求める傾向が強いことが報告されている（Ishii et al., 2017）。

文化的に不適合なサポートを求めると，ストレスが軽減されないばかりか，かえってストレスが増えてしまうことになる。強いストレス状況においてヨーロッパ系アメリカ人に明示的なサポートを求めさせる（親しい他者にアドバイスを求める手紙を書かせる）と心理的ストレスが低下するのに対し，アジア系の人々に明示的なサポートを求めさせると，心理的ストレスが上昇する（Taylor et al., 2007）。ストレスの生理学的な指標であるコーチゾルも，アジア系の人々に明示的なサポートを求めさせると高まった（Taylor et al., 2007）。

アジア系の人々が援助を求めることに抵抗がある理由としてKimら（Kim et al., 2006；Kim et al., 2008；Taylor et al., 2004）は関係性の悪化に対する懸念を挙げているが，援助の希求がどのように関係性を悪化させるのか，実際に関係を悪化させるのかについては議論の余地がある。日本では，大人の甘えは「不適切な行動」とみなされる（Yamaguchi, 2004）が，甘えられる側は甘えを好ましく感じることもある（Niiya, Ellsworth, & Yamaguchi, 2006）。友人が自分に甘えてきた状況

を読んだ日本人は，友人が他の友人に甘えた状況や誰にも甘えなかった状況を読んだ者よりも，ポジティブ感情が高く，相手に対して親しみをより強く感じていた。友人に甘えられて嬉しいと感じるのは，相手に対して親しさを感じ，状況に対するコントロール感が高まるためである（Niiya & Harihara, 2012）。実験において，サクラに援助を求められた日米の大学生は，その前後でサクラに対して好意と親しみをより強く感じるようになり，社交的な印象をより強く持つようになった（Niiya, 2016）。実験者がサクラを手伝うように指示した場合は，そのような上昇は見られなかったことから，サクラに対する好ましさは相手を援助したことによるのではなく，相手から援助を求められたためであると言える（Niiya, 2016）。これらの結果は，場合によっては援助要請をしても関係性は悪化しないどころか，良くなる可能性があることを示す。ただし，援助のコストが大きい場合や，親しくない他者が援助を要請した場合はポジティブ感情も援助要請者に対する親しみも低下することから，援助要請が関係性を向上させるのは限られた状況であると言える（Niiya & Ellsworth, 2012）。

また，Kim らの研究では言及されていないが，アジア系の人々が援助を求めることに抵抗がある要因として，要請の断りにくさがあると考えられる。相互協調的な文化では密接な対人関係を維持する必要があるからこそ，援助を求められれば都合が悪くても援助をする義務が生じ，断るとしても罪悪感や関係性の悪化は避けられない。関係性の親しさを担保にした甘えであれば，なおさら断りづらいことが予想される。アジア系の人々が援助要請をしにくいのは，援助者に対する強制力と負担が大きく，甘えのように関係性を促進させる可能性があったとしても，関係性を悪化させるリスクの方が大きいためとも考えられる。

3.2　援助を受けることの文化差

アジア系の人々は，相手に心理的な負担や迷惑をかけ，批判を受けたり関係性を害したりすることを恐れるために明示的なサポートを求めない。では，援助を受ける時の反応も文化によって異なるのだろうか。

被援助者の反応に文化差があることは数々の研究で示されている。たとえばヨーロッパ系アメリカ人はサポートを受けると誇らしい気持ちや自尊感情などのポジティブ感情が高まると予測したのに対し，日本人は恥ずかしい，申し訳ないなどのネガティブな感情が高まると予測していた（Ishii et al., 2017）。日本人が援助を受けるとネガティブな感情を抱くのは，関係性の悪化を懸念するためだけでなく，交換規範（exchange norms）を遵守していることも一因として挙げられる。ヨーロッパ系アメリカ人，日本人，インド人を比較した研究では，日本人とアメリカ人は友人から援助を受けた際にその恩恵を返報する義務があるという交換規範に従うのに対し，インド人は相手の必要に応じて援助を行うべきであるという共同規範（communal norms）に従うことが示された（Miller, Akiyama, & Kapadia, 2017）。また，友人から援助を受けるシナリオを読ませたところ，日本人が最もネガティブな反応を示し，関係性の悪化の懸念も最も強かった。交換規範に従う人ほど援助を受けることで関係性が悪化することを危惧し，関係性の懸念がネガティブな反応を予測していた。興味深いことにアメリカ人と日本人はどちらも恩恵を返報することを重視していたが，「返報」の意味が異なっていた。日本人にとって恩恵の返報は，受けたものと同じだけのコストを伴う援助を援助者に返すことであり，援助者との関係を維持するための方策として捉えられていた。一方，アメリカ人にとっての返報は援助者に感謝の意を示すことで相手の自尊心を高めることであり，自己の独立性を維持するための方策として捉えられていた。Miller et al.（2017）の結果は，同じアジア人であっても，日本人とインド人では援助に対する捉え方が異なること，そして同じ交換規範に従っている日本人とアメリカ人でも，返報性の内容や理由が異なることを示した点で重要な知見と言える。

アジア文化圏の人々は関係性の悪化に対する懸念や返報の義務感から援助を受けることに対して消極的になることがうかがえる。しかし，Miller et al.（2017）は援助やサポートが被援助者の要請によってなされたもの（solicited support）なのか，相手が勝手に提供してくれたものなのか（unsolicited support）を区別して検討していない。Mojaverian and Kim（2013）は，アジア人が援助

を受けることに抵抗を示すのは，援助要請の結果として援助が生じているためであり，援助の要請をせずに相手が提供してくれる援助は関係性が密接であることを示すため，好ましく感じると考え，この仮説を検証した。予測通り，アジア系アメリカ人は要請を伴う援助を受けた時には，要請を伴わない援助を受けた場合よりもストレスが高く，ポジティブ感情が低かった。ヨーロッパ系アメリカ人は援助が要請されたものであっても，そうでなくてもストレスとポジティブ感情に差は見られなかった。アジア系の人々にとって，援助を受けることそのものよりも，援助を求めることで援助者に負担をかけることの方がストレスフルであることがわかる。

ただし，アメリカ人も援助を受けることを必ずしも好ましいと考えているわけではない。Bolger and Amarel（2007）はアメリカ人大学生にスピーチの準備をさせるというストレスの高まる状況を作った。この時，別の実験参加者（サクラ）から目に見えないサポート（invisible support；サクラの実験者に向けた発話の中にストレス軽減のヒントがある）を受けると，サポートのない場合に比べてストレスの上昇が抑制された。ところが，目に見えるサポート（visible support；サクラが参加者に向けた発話でストレス軽減のヒントを伝授する）を受けると，ストレスの上昇がサポートのない場合よりも大きくなっていた。さらにBolger and Amarel（2007）は目に見えるサポートであっても，援助者が被援助者の能力を高く見ていることがわかる場合はストレスの上昇が抑制されることを見出した。つまり，アメリカ人がサポートを受けるのを好ましく思わないのは，援助者から能力が無いと評価される懸念があるためだと言える。また，アメリカ人は職場において，同僚からの援助に対してネガティブな信念をもつことが報告されている。Thompson and Bolino（2018）は援助を受ける時のネガティブ信念として，「相手に悪い印象を与えてしまうこと」，「返報の義務に対する負担」，「自分の仕事は自分ですべきという意識」，「同僚に対する不信感」，「同僚の無能さ」を挙げ，これを測定するための尺度を開発した。援助を受けることに対してネガティブな信念をもつ人ほど，職場で援助を受けることが少なく，仕事へのコミットメントが低く，業績も悪く，上司からの評価も悪かった（Thompson & Bolino, 2018）。

これらの研究は，アメリカ人も援助（特に目に見える援助）を受けることに少なからず抵抗があることを示すが，援助を好ましく思わない理由には文化差がある。アジア人には関係性の悪化に対する懸念が挙げられるのに対し，アメリカ人には自己評価と自尊心に対する脅威が挙げられる。知覚された情緒的サポート（perceived emotional support）とポジティブ感情はアメリカ・日本・フィリピンの三カ国において正の相関があったが，アメリカでの相関は日本やフィリピンでの相関よりも弱かった（Uchida et al., 2008）。さらに，自尊心を統計的に統制すると，知覚された情緒的サポートとポジティブ感情の相関は日本とフィリピンでは有意のままであるのに対し，アメリカでは無相関となった。アメリカでは援助を受ける時に自尊心が重要な役割を担っており，自尊心を高めるまたは低める程度によって援助の好ましさが変わると言える。一方，アジアでは関係性を促進・阻害する程度によって援助の好ましさが変わると言えよう。

実際にアメリカでは援助者と被援助者の自律性が保たれる問題解決型の援助が好ましく，日本では問題解決型の援助よりも関係性が維持される情緒的な援助の方がより好ましく評価される（Morling, Uchida, & Frentrup, 2015）。Morling et al.（2015）は状況サンプリング法により，アメリカと日本の大学生に援助を受けた最近の経験を思いつく限りリストアップさせ，本人および別の日米の参加者に場面の評価をさせた。アメリカでは問題解決型の援助が日常的に生じており，好ましいと評されていた。援助者は個人の自由意思で援助を行っていると考えられており，被援助者も返報できる能力があると評価されていた。日本でも問題解決型の援助は情緒的な援助よりも多く経験されていたが，問題解決型の援助に対する反応は情緒的な援助に対する反応よりネガティブであり，「お節介」であると評されていた。一方，情緒的な援助は援助者の自由意思によるものと理解されており，援助者の負担も問題解決型よりは少ないと考えられていた。日本人にとって情緒的な援助の方が問題解決型の援助よりも受け入れやすいのは，先のMojaverian and Kim（2013）の研究にもあるように，相手の負担と関係性が悪化するリス

クが少ないと知覚されるためであろう。また，情緒的な援助は，援助要請の結果としてもたらされた場合でも受け入れやすかった。情緒的な援助は親しい他者に求めることが多く，相手との親しい関係を担保にした甘えであるがゆえに好ましいと評価されていたのだろうと Morling et al.（2015）は考察している。

4. 助ける理由と助けない理由の文化差

ここまで，人を助けることには文化差があり，それは対象者によって異なること，そして援助要請に関する考え方や援助を受けることに対する反応には文化差があることを論じてきた。この項では人が援助を行う，または躊躇する理由の文化差について，Riemer et al.（2014）が提唱する個人中心型（person-centric model）と規範文脈依存型（normative-contextual model）の区別を用いて整理する。

態度に関する研究は社会心理学の中でも古い歴史があるが，Riemer et al.（2014）はそのほとんどが相互独立的な文化の影響を受けたものであり，態度を個人の好みとして扱ってきたことを指摘した。個人中心モデルでは，態度は個人の好みそのものであり，社会的規範から独立して存在する。態度（好み）は個人の中で一貫性があり，時間的にも安定している。どのような状況においても個人の態度（好み）の方が社会的な規範よりも行動に影響力をもつ。個人の態度（好み）と社会的規範が相反すると葛藤が生じ，社会的規範に則った行動を取ると，自己の本来感（自分らしさが感じられること）が低下する。これに対し，規範文脈依存モデルでは，その場の規範が個人の態度を形成し，それが個人の好みとなる。その場の規範から態度が形成されるので，規範と態度の間に葛藤が生じることはない。個人の態度が行動を規定する場合も，態度は規範と一致していることから，規範の行動への影響は大きいと言える。Riemer et al.（2014）の理論的枠組みを向社会的行動に当てはめると，個人中心型の相互独立的な文化では個人的な要因（態度や感情）が向社会的行動を導くのに対し，規範文脈依存型の相互協調的な文化では規範や状況，相手のニーズなどの外的な要因が向社会的行動を導くことが見えてくる。

4.1 個人中心型の援助（person-centric model of helping）

相互独立的な文化では，援助行動は各個人が自律的に人を助けたいと思うことで生じるところが大きい。人は他者に対して共感するほど援助を行う（Batson et al., 1988；Dovidio et al., 2006）が，イギリス人を対象にした研究では，共感が援助行動を促進するのは自ら相手を助けたいという自律的な動機付け（autonomous motivation）を高めるためであり，周りからのプレッシャーなどによる統制的動機付け（controlled motivation）によるものではないことが示された（Pavey, Greitemeyer, & Sparks, 2012）。また，知人であれ家族であれ，アメリカ人は相手に対して好意を感じるか否かで援助すべきであるかを判断する（Miller & Bersoff, 1998）。命の危険に関わるような状況での援助や，親が子どものためにする援助に関してはアメリカ人も道徳的な義務感を感じるが，それ以外の状況では援助をする，しないの判断は個人の自由な選択によるものと考えられている（Miller, Bersoff, & Harwood, 1990）。これらはアメリカ人が援助場面を見た時，援助者が自由意思により行動をとっていると考えることを示した Morling et al.（2015）の知見と一致する結果である。相互独立的な文化では，ボランティア活動を説明する個人差変数の中でも，共感性（other-oriented empathy）や他者に良い影響を与えたいという動機付け（prosocial power motivation）は重要な役割を果たす（Aydinli et al., 2014；Omoto, Snyder, & Hackett, 2010；Penner, 2002）。共感性はアメリカではボランティア活動を予測していたが（Penner, 2002），香港では予測しない（Aydinli-Karakulak et al., 2016）。

相互独立的な文化では感情表現，高い自尊心，自律性，個人の能力が重要とされるため，自尊心の回復が援助の動機となる（Chen et al., 2012）。Chen et al.（2012）はアメリカ人と日本人大学生に，最近，身近な人が経験したストレスの高い状況について記述させ，その時に行った援助やサポートおよびそれらに至った動機について尋ねた。その結果，アメリカ人は相手の自尊心を回復させたいという動機づけが，相手に親しみを感じてほしいという動機づけよりも強かったのに対し，日本人は親しみを感じてほしいという動機づけの方が相手の自尊心を高めたいという動機づけ

よりも強かった。さらに興味深いことに，アメリカでは相手の自尊心を高めたいという動機づけが強い人ほど，情緒的なサポートも問題解決のためのサポートも行う傾向があったのに対し，日本では自尊心を回復させたいという動機づけはいずれのサポートも予測しなかった。

先述の Morling et al.（2015）の研究ではアメリカでは，問題解決型の援助の方が情緒的な援助よりも多いという結果であったのに対し，Chen et al.（2012）の研究では，情緒的な援助の方が問題解決型の援助よりも多いという矛盾した結果が報告されている（日本人はどちらの研究でも問題解決型の援助の方が情緒的な援助よりも多いという結果であり，一貫している）。この矛盾は，Morling et al.（2015）が調査対象者に「援助を受けた時の状況」を想起させたのに対し，Chen et al.（2012）は「親しい相手に援助をした時の状況」を想起させたという立場の違いによって説明ができる。実際は問題解決型の援助の方が頻繁だと考えられるが，アメリカ人が援助をした状況を想起する場合，相手の自尊心の回復が最も顕著な情緒的な援助を想起しやすかったと推察できる。

4.2　規範文脈依存型の援助（normative-contextual model of helping）

相互独立的な文化での援助は，援助者の共感性や意思，他者の自尊心を回復したいという動機づけなど，個人の内的な要因によるところが大きい。これに対し，相互協調的な文化での援助は援助者個人の要因よりも，社会的規範・義務感・被援助者のニーズ・他者からの評価などの外的な要因によるところが大きい。

社会的規範　相互協調的な文化では，個人の意思や信念よりも，その場の規範や他者の動向が行動を規定する。環境保護活動も一種の向社会的行動と言えるが，個人の環境問題に対する態度と環境保護行動の相関は研究対象となった 47 の国々で .05 から .40 まで大きくばらつきが見られ，相互独立的な文化をもつ国ほどその相関は強かった（Eom et al., 2016）。さらにヨーロッパ系アメリカ人では，環境問題が気になる人ほど値段が高くても環境に配慮した商品を選ぶ傾向が見られたのに対し，日本人では環境問題を気にする程度ではなく，知覚された社会的規範（周りの何人くらいが環境に配慮した行動をとっていると思うか）が環境に優しい商品を選ぶ傾向を予測していた。

義務感　インドでの援助行動は義務感によって説明されるところが大きい。アメリカでは援助は個人の自由意思によるものであり，自己のニーズを犠牲にすることなく，他者のニーズを満たせる場合にのみ援助がなされるのに対し，インドでは援助は義務であり，社会での個人の役割と捉えられている（Miller, 1994；Miller & Bersoff, 1998；Miller, Bersoff, & Harwood, 1990）。ただし，インドでは義務を果たすことは個人のニーズを犠牲にすることではなく，本来の自己の使命を全うすることと理解される。アメリカ人は義務感から援助した場合，個人の自由意思で援助した場合よりも満足感が低くなるのに対し，インド人はいずれの場合も満足感が高かった。この結果は，義務により援助することはインド人にとっては，自由意思で援助するのと同じほど好ましいことであることを意味する。他者に骨髄の提供をする，またはしない状況をアメリカ人とインド人に提示し，それに対する反応を調べた研究（Baron & Miller, 2000）では，インド人の方がアメリカ人よりも援助をする責任があると感じており，援助のニーズが最も低い条件（移植者が世界の反対側に住んでいる見知らぬ他者で，自分の他にも 100 万人適合者がいる場合）においても，インド人の方がアメリカ人よりも骨髄の提供をする責任があると回答していた（64% 対 30%）。援助に賛同する理由を自由記述で求めたところ，アメリカ人はインド人よりも提供者の自由意思（25% 対 12%）と関係の近さ（26% 対 18%）を述べる傾向が強く，インド人はアメリカ人よりも相手や社会にもたらす恩恵について述べていた（12% 対 29%）。

援助のニーズ　相互協調的な文化では，援助行動の要因として，援助者の動機づけよりも被援助者のニーズが重要な役割を果たす。先述の Morling et al.（2015）でも，日本人の被援助者は援助が必要な場合ほど，援助を受けることを好ましく感じていた。日本人とアメリカ人の見知らぬ他者に対する援助行動を比較した研究（Niiya, Handron, & Markus, in prep）では，日本人の方がアメリカ人よりも相手の援助のニーズに対して敏感であることが示された。日本人とアメリカ人に満員電車の中で妊婦のように見える女性に席を譲

るか尋ねる際に，その女性が妊婦である可能性（援助のニーズの度合）を10%から100%まで10%刻みで操作した。その結果，日本人もアメリカ人も援助のニーズが高いほど援助をすると回答する傾向が強くなるものの，そのニーズと援助の関係は日本人の方がアメリカ人よりも顕著であった。道端でしゃがみこんでいる人が病気である可能性を同様に10%刻みで操作した場合でも同様の結果となった。これらは日本人の援助はアメリカ人のそれよりも相手のニーズの度合に影響を受けていることを示す。また，援助のニーズが不明確な状況において，日本人はアメリカ人よりも援助のニーズを低く見積もり，援助が相手にもたらす利益も少なく見積もる傾向が見られた。援助のニーズが不明確な状況において，日本人がアメリカ人ほど見知らぬ他者に対して援助を行わないという文化差は，日本人の援助のニーズの見積もりの低さと相手にもたらす利益の見積もりの低さで説明された。さらに，「前を歩く人が転んだものの，自分はそのまま通り過ぎた」というシナリオを日本人とアメリカ人に提示し，足を止めなかった理由を自由記述で求めたところ，日本人は相手が援助を必要としていなかったと回答する人が37%で，アメリカ人の18%よりも高かった。一方，アメリカでは自分に帰する要因（自分は面倒くさがりだから，など）を述べた者が20%であり，日本の4%よりも高かった。

援助の結果に対する懸念　相互独立的な文化では行為の責任は行為者の意思・意図に規定されるが，相互協調的な文化では行為の結果に規定される（Feinberg et al., 2018）。従って，援助行動も個人の意思や意図よりも，他者にもたらす利益の大きさとその確実性の推測によって規定されると考えられる。Feinberg et al.（2018）はある行為者が他者に害を及ぼしたシナリオを中国人とアメリカ人に提示し，行為者にどのくらい責任があると思うか，どのくらいの処罰が妥当であると思うかを尋ねた。アメリカ人は行為者に自由意思があると思う人ほど，行為者に責任があると感じ，処罰も重くすべきであると回答したのに対し，中国人は損害が重大であるほど行為者に責任があると感じ，処罰も重くすべきであると回答した。Feinberg et al.（2018）は他者に害を与えた状況のみを検討しているが，向社会的行動においても同様の結果になると考えられる。良かれと思って行った向社会的行動が，意図せずとも他者に被害を与えてしまうことがある。たとえば目の不自由な人が横断歩道を渡るのを手伝ったが，思いがけず相手を転倒させ怪我をさせてしまった場合，相互独立的な文化では行為者に援助の意図があったため，行為者は責められることは少ないが，相互協調的な文化ではたとえ行為者に援助の意図があったとしても，悪い結果が生じてしまったために，咎められることが往々にあると考えられる。相互協調的な文化において人々が援助をする際に，相手のニーズに敏感になり，自分の行為が相手の利益になるのか熟考せざるを得ない理由を示す知見と言える。

評判の維持　相互協調的な文化では，援助行動を決定する際に他者からの評価を気にする必要がある。相互協調的な文化は関係流動性や居住地の流動性の低い社会に多い。居住地の流動性は，ある社会・地域における人々の移住の頻度を指し，居住地の流動性の低い社会では，多くの人々は生まれ育った地域で暮らし，個人は閉鎖的かつ安定したソーシャルネットワークに組み込まれている。関係流動性とは，社会の中で自由に新たな対人関係を形成したり，既存関係を維持・解消できる程度のことを言う（e.g., Yuki & Schug, 2012；Thomson et al., 2018）。居住地の流動性の低い社会では，関係流動性も低く，人々は新しい対人関係を築く機会が少なく，既存の対人ネットワークから抜け出すことは容易ではない。このように流動性の低い社会では，内集団びいきが生じ，外集団よりも内集団の成員に対して多くの援助を行うのに対し，関係流動性・住居地の流動性の高い社会では，外集団の成員に対しても内集団の成員に対するのと同様に援助をする（Li, Li, & Li, 2019）。さらに関係流動性の低い社会における内集団びいきは，他者からの視線がある場合にのみ生じる（Mifune, Hashimoto, & Yamagishi, 2010；Oda et al., 2011）ことから，閉鎖的な社会においては他者からの評価が人々の向社会的行動を促していることが伺える。

関係流動性や移住地の流動性の低い社会では，どのような評判が向社会的行動を促すのだろうか。関係流動性の低い社会では，新たな関係を築くときに必要なポジティブ評判を得ることよりも，既存の関係から排除されないためのネガティ

ブな評判を抑制することの方が重要であるという知見がある（Hashimoto & Yamagishi, 2015；岩谷・村本・笠原，2016）。つまり，日本人がアメリカ人ほど援助行動を取らないのは，作為による失敗の方が不作為による失敗よりもネガティブ評判を呼ぶため，これを避けようとしていると考えられる。山本・結城（2019）はトロッコ問題を用いてこの仮説を検証した。その結果，日本人もアメリカ人同様の倫理的な判断をする（一人を犠牲にすることで五人の命を助けるべきだと判断する）ものの，行動の意図は日本人の方が低く，さらに関係流動性が低いと知覚する人ほどポジティブ評判を期待しなくなり，それが行動意図を抑制することが明らかになった。予測に反して，ネガティブ評判は行動意図の文化差を説明しなかった。独裁者ゲームにおいて，内集団の成員に均等な配分を行う理由を参加者に尋ねた研究（Oda et al., 2011）では，第三者に悪い評判を与え，罰を受けることに対する危惧ではなく，第三者からの良い評判を得ることが均等配分の主な理由であることがわかった。つまり，Oda et al.（2011）の研究においても，山本・結城（2019）の研究においても，ポジティブ評判に対する期待が向社会的行動を促していることになる。向社会的行動，とりわけ援助行動に関しては，社会において賞賛される行動なので，関係流動性の低い社会においても，ネガティブ評判のリスクよりもポジティブ評判を得られる可能性の方が重要であると推察できる。ただし，見知らぬ他者に手を差し伸べるなど，自己の行為が相手のためにならない可能性が少なからずある場合においては，ネガティブ評判の回避がより重要になる可能性が考えられる。

まとめると，個人中心型の援助は，個人の価値観や信念，その時の感情など，比較的シンプルな要因によって生じるのに対し，規範文脈依存型の援助は様々な外的な要因（社会的な規範・義務感・他者のニーズ・援助の結果の予測・第三者からの評価の予測など）が複雑に作用しあった結果として生じることがうかがえる。状況が明確な場合は個人中心型でも規範文脈依存型でも援助行動に差異は見られないが，状況が曖昧な場合においては，文化によって援助行動，および行動に至るまでの心理的なプロセスの差が顕著になると考えられる。

5. 文化心理学の視点を取り入れた助け合い研究の展望

最後に，助け合い研究が今後扱うべき課題について，文化心理学的な視点を取り入れて論じる。

5.1 援助行動の範囲を再考する

これまで向社会的行動は，「他者の利益になる行動」と定義されてきた（Dovidio et al., 2006）。また，Nadler（2020）は援助行動を「他者に利益やウェルビーイングの向上をもたらそうとする故意的な行動」としている。しかし，これまでの向社会的行動や援助行動の研究は主に作為の行動に焦点を当てており，行動を伴わない不作為の援助に関しては研究が進んでいない。他者が援助を求めていない状況では，「待つ」や「見守る」など，直接手を出さないことが援助になることがある（山村，2013）。満野・三浦（2010）は日本人大学生に「親密な同性の友人に対してあえて思いやり行動をしなかった状況」およびその理由について自由記述で尋ねたところ，相手が余計に傷つきそうだったなどの「傷つけ懸念」，自分で解決した方が相手のためになるといった「自力解決」，自分ならそうしてほしいと思ったなどの「自己本位」，その場の雰囲気が気まずくなるなどの「場の尊重」などの回答が得られた。ほとんどの回答は相手のニーズを推測した上で，行動を起こさないことが相手のためになると考えた結果であることを示す。また，山村（2013）は小学生と大学生に，友人が明らかに困っている状況を提示し，その中でも「援助しない」と回答した者の援助しない理由を分類した。その結果，共感的なものや，他者の価値観の尊重などの利他的な理由が多く挙げられていたことから，援助しないことが他者の利益になる，つまり援助の一種であると指摘している。教員が子どもたちの学習の一環として，あえて失敗を体験させるべく援助を控えるのも，見えない形の援助だと言える。日本人は明示的なサポートよりも暗黙のサポートを好む（Ishii et al., 2017）ことを考えると，日本をはじめ相互協調的な文化では，相手のニーズを反映した不作為の援助が相互独立的な文化より多く生じていると考えられる。しかし，このような行動を伴わない援助は，援助研究ではほとんど扱われず，文化差に関

する研究も進んでいない。

「見えないサポート」に関しては，先述のBolger and Amarel（2007）の研究をはじめ，欧米諸国でも研究がなされている。これらの研究が扱うのは，被援助者側から援助が見えないという意味での「見えないサポート」であり，実際は何らかの作為の援助やサポート行動が取られていることが多い。サポートを受ける側にとっては，サポートが見える場合よりも，見えない場合の方が受ける利益は大きい。たとえばアメリカ人のカップルを一か月間追った調査では，強いストレスが生じる状況において，一方はサポートをしたと報告しているのに対し，もう一方はそれを受けていないと報告した日（つまり見えないサポートが生じた日）の翌日に，ストレス経験者の抑うつ状態が最も低下していた（Bolger, Zuckerman, & Kessler, 2000）。一方がサポートをしたと報告し，もう一方もサポートを受けたと報告した翌日には，抑うつ状態も不安も増加が見られた。目に見えるサポートを受けると，その日のうちに関係満足度と不安が同時に上昇するのに対し，目に見えないサポートを受けると，その日のうちには何も変化がなく，その翌日には関係満足度だけが上昇するという報告もある（Girme et al., 2018）。アジア系の人々は関係性が悪化することに対する懸念や返報の義務感により，援助を求めることにも受けることにも抵抗を示し（Kim et al., 2008），明示的なサポートよりも暗黙のサポートを好む（Ishii et al., 2017）。見えないサポートは東アジア文化圏においてことに重要であると考えられ，見えないサポートを可能とする要因や効果のさらなる研究が待たれる。

行動として表れない援助や，受け手に見えない援助を促す心理的な要因は，受け手にも第三者にも見える援助を促す心理的な要因とは異なる可能性がある。返報性の期待や評判の期待・懸念などの要因は見える援助をより強く予測し，他者への思いやり，共感，関係性の調和などの要因は見えない援助をより強く予測する可能性がある。援助を規定する要因が文化により異なることも含めると，援助の種類・援助をもたらす心理的な要因・文化の交互作用を細かく検討する研究が求められるだろう。

向社会的行動や援助行動がもたらすと言われる「他者の利益」についても，より深い考察が必要である。ある行動が他者の利益になるかどうかを見定めるのは誰なのか。行為者が他者の利益になると思えば，それで向社会的と呼べるのだろうか。これまで欧米中心に進められてきた向社会的行動の研究では，個人の意図や個人の感情（共感性）次第でその行動を定義づけることができたが，相互協調的な規範文脈依存モデルの視点を取り入れると，向社会的行動の定義すら難しいことがわかる。規範文脈依存モデルでは，向社会的行動は個人の意図や感情によって生じるものではなく，規範や文脈によって生じるものである。行為者が援助のつもりでとった行動も，他者のニーズに適合しない行動であれば，単なるお節介，はた迷惑となってしまう場合もある。特に日本人は援助がときにお節介になりうることにも敏感である。行為者は他者の利益になると信じて，自身の行動を援助だと思っていたとしても，相手がその行為を望んでおらず，相手にとって利益にならない場合は，その行為は援助ではなく，お節介となる。規範文脈依存型の援助が主流の日本では，自己の視点だけでは，行為は「援助」とはなりえない。援助行動の定義に含まれる行為の範疇が文化によって異なることを考えると，援助の頻度を文化間で単純に比較することに果たして意味があるのか再考する必要があるだろう。

難しいのは「他者の利益」は被援助者の判断によるものとも限らない点である。薬物中毒者に求められるままに薬物を与える場合，受け手はその行為が自分に利益をもたらし，援助だと認識したとしても，長期的に見ればその行為は相手の利益にはならないため，第三者からすれば援助とは呼べない。自殺願望のある人に「放っておいてほしい」と言われた場合，本人の希望通りにそっと見守ることが果たして本当に援助と言えるのだろうか。自殺希少地帯の研究（岡，2013）では，住民は助けを求めずとも，近隣の人々が勝手に世話を焼くことが記されている。被援助者がどう思うかに関係なく，援助したいと思えば援助し，その結果，相手にさらなるストレスを与えることもあれば，人の命を救うこともある。つまり，行動として表れない不作為の援助が他者の利益になることがある一方で，「余計なお世話」が他者の利益となることもある。

アジア人は援助を求めることに抵抗があり，必要な時でも自ら援助を求めないため，援助のニーズが他者からは見えづらい。さらに日本では「そっとしておく」ことに思いやりを感じ，援助をお節介と非難することもある。日本において援助行動を理解するには，相互協調的な文化背景を考慮に入れた意思決定モデルを発展させる必要があるだろう。

5.2　援助者と被援助者の区別について再考する

これまでの研究では，援助は他者の利益になる行動とされてきたが，援助者にも大きな利益があることがわかっている。人は他者に助言をする方が，助言を受ける時よりも自己のモチベーションが高まり，自信もつく（Eskreis-Winkler, Fishbach, & Duckworth, 2018）。幹細胞移植を受けた患者が，これから移植を受ける患者に向けて，その時の心情や心構えを手紙に書くと，体験の事実のみを記述した場合に比べ，抑うつや身体的症状が軽くなり，特にポジティブな言葉を多く用いた人ほど回復が早かった（Williamson et al., 2017）。中国人の参加者においても，誰かを援助したり，人のためにお金を使ったなどの向社会的行動を思い浮かべさせると，試験勉強をしたり，自分のためにお金を使ったことを思い浮かべる場合に比べ，身体能力が高まる（ダンベルをより長く持ち上げる，握力が強くなる，歩行速度が上がるなど）ことが明らかになった（Guo, Wu, & Li, 2018）。また，日本人でもアメリカ人でも，友人から甘えられると友人に対して親しさを感じ，ポジティブ感情が高まり，コントロール感が増すという知見がある（Niiya & Ellsworth, 2012；Niiya et al., 2006）。援助が援助者にとって心理的・身体的な利益があるということは，他者に援助をする機会を与えたり，他者に援助を求めることは，援助を求めているように見えて，実は他者を援助している場合がある。たとえば高齢者のウェルビーイングを高めるために，あえて助言を求めるような場合，援助者と被援助者の役割がいつの間にか入れ替わっている可能性もある。援助を求めたり，人に甘えたりすることは日本では奨励されていないが，それが場合によっては人助けになるとしたら，どのような条件で，どのような結果を招くのか検討していくべきである。

5.3　最後に

本論文では，向社会的行動，とりわけ協力と援助行動を中心にどのような文化差が報告されてきたかをまとめた。協力・援助行動はどの文化においても普遍的に見られるものの，相互協調的な文化の方が多いとする知見と，相互独立的な文化で多いとする知見が混在する。相互協調的な文化では，他者との関係性によって協力・援助の度合いが異なることを指摘し，どちらの文化の方がより向社会的かという議論ではなく，どのような条件で文化差が生じやすいかを検討していく必要があることを指摘した。次に援助を求め，受けることに着目し，相互協調的な文化の人々は援助を求め受けることは関係性を悪化させる可能性があるとして抵抗があることを論じた。しかし，場合によっては甘えのように関係性を促進する可能性があることを指摘した。さらに援助行動を促進または躊躇させる要因の文化差について，相互独立的な文化での援助は個人中心型であり，個人の意思・価値観・感情・能力によって決定されるのに対し，相互協調的な文化における援助行動は規範文脈依存型であり，社会的な規範や他者のニーズ，他者からの評価などの外的な要因によって規定されることを論じた。援助行動に至るまでには複雑な社会的認知プロセスが存在することから，援助行動はその文化背景に形成されていると言えよう。今後は「援助」や「援助者」の枠組みにこれまで含まれていなかった相互協調的な文化で生じやすい「行動を伴わない援助」や，被援助者に気づかれない「見えない援助」にも焦点を当て，これらの援助が生じる要因や効果の文化差について検討していく必要があるだろう。また，「援助者」と「被援助者」のダイナミックな関係性について，文化の視点を取り入れた研究がなされることを期待したい。

文　　献

Allik, J., & Realo, A. (2004). Individualism-collectivism and social capital. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, *35*, 29–49.

Aydinli, A., Bender, M., & Chasiotis, A. (2013). Helping and volunteering across cultures: Determinants of prosocial behavior. *Online Readings in Psychology and Culture*, *5*, 1–27.

Aydinli, A., Bender, M., Chasiotis, A., Cemalcilar, Z., & Van

de Vijver, F. J. (2014). When does self-reported prosocial motivation predict helping? The moderating role of implicit prosocial motivation. *Motivation and Emotion*, *38*, 645–658.

Aydinli-Karakulak, A., Bender, M., Chong, A. M. L., & Yue, X. (2016). Applying Western models of volunteering in Hong Kong: The role of empathy, prosocial motivation and motive–experience fit for volunteering. *Asian Journal of Social Psychology*, *19*, 112–123.

Baron, J., & Miller, J. G. (2000). Limiting the scope of moral obligations to help: A cross-cultural investigation. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, *31*, 703–725.

Batson, C. D., Dyck, J. L., Brandt, J. R., Batson, J. G., Powell, A. L., McMaster, M. R., & Griffitt, C. (1988). Five studies testing two new egoistic alternatives to the empathy-altruism hypothesis. *Journal of Personality and Social Psychology*, *55*, 52–77.

Batson, C. D., & Shaw, L. L. (1991). Evidence for altruism: Toward a pluralism of prosocial motives. *Psychological Inquiry*, *2*, 107–122.

Bolger, N., & Amarel, D. (2007). Effects of social support visibility on adjustment to stress: Experimental evidence. *Journal of Personality and Social Psychology*, *92*, 458–475.

Bolger, N., Zuckerman, A., & Kessler, R. C. (2000). Invisible support and adjustment to stress. *Journal of Personality and Social Psychology*, *79*, 953–961.

Boyd, R., & Richerson, P. J. (2009). Culture and the evolution of human cooperation. *Philosophical Transactions of the Royal Society B*, *364*, 3281–3288. https://doi.org/10.1098/rstb.2009.0134

Buchan, N. R., Croson, R. T. A., & Dawes, R. M. (2002). Swift neighbors and persistent strangers: A cross-cultural investigation of trust and reciprocity in social exchange. *American Journal of Sociology*, *108*, 168–206.

Cameron, L. A. (1999). Raising the stakes in the ultimatum game: Experimental evidence from Indonesia. *Economic Inquiry*, *37*, 47–59.

Chen, J. M., Kim, H. S., Mojaverian, T., & Morling, B. (2012). Culture and social support provision: Who gives what and why. *Personality and Social Psychology Bulletin*, *38*, 3–13.

Chuah, S. H., Hoffmann, R., Jones, M., & Williams, G. (2009). An economic anatomy of culture: Attitudes and behaviour in inter-and intra-national ultimatum game experiments. *Journal of Economic Psychology*, *30*, 732–744.

Dovidio, J. F., Piliavin, J. A., Schroeder, D. A., & Penner, L. (2006). *The social psychology of prosocial behavior*. Lawrence Erlbaum Associates Publishers.

Eom, K., Kim, H. S., Sherman, D. K., & Ishii, K. (2016). Cultural variability in the link between environmental concern and support for environmental action. *Psychological Science*, *27*, 1331–1339.

Eskreis-Winkler, L., Fishbach, A., & Duckworth, A. L. (2018). Dear Abby: Should I give advice or receive it? *Psychological Science*, *29*, 1797–1806.

Feinberg, M., Fang, R., Liu, S., & Peng, K. (2018). A world of blame to go around: cross-cultural determinants of responsibility and punishment judgments. *Personality and Social Psychology Bulletin*, *45*, 634–651.

Feygina, I., & Henry, P. J. (2015). Culture and prosocial behavior. In D. A. Schroeder & W. G. Graziano (Eds.), *Oxford library of psychology. The Oxford handbook of prosocial behavior* (p. 188–208). Oxford University Press.

Gelfand, M. J., & Realo, A. (1999). Individualism-collectivism and accountability in intergroup negotiations. *Journal of Applied Psychology*, *84*, 721.

Girme, Y. U., Maniaci, M. R., Reis, H. T., McNulty, J. K., Carmichael, C. L., Gable, S. L., ... & Overall, N. C. (2018). Does support need to be seen? Daily invisible support promotes next day relationship well-being. *Journal of Family Psychology*, *32*, 882–893.

Goetz, J. L., Keltner, D., & Simon-Thomas, E. (2010). Compassion: an evolutionary analysis and empirical review. *Psychological bulletin*, *136*, 351–374.

Guo, Q., Wu, R., & Li, X. (2018). Beneficial effects of prosocial behaviour on physical well-being in Chinese samples. *Asian Journal of Social Psychology*, *21*, 22–31.

Hashimoto, H., & Yamagishi, T. (2015). Preference-expectation reversal in the ratings of independent and interdependent individuals: A USA–Japan comparison. *Asian Journal of Social Psychology*, *18*, 115–123.

Hayashi, N., Ostrom, E., Walker, J., & Yamagishi, T. (1999). Reciprocity, trust, and the sense of control: A cross-societal study. *Rationality and Society*, *11*, 27–46.

Henrich, J., Boyd, R., Bowles, S., Camerer, C., Fehr, E., Gintis, H., & McElreath, R. (2001). In search of homo economicus: behavioral experiments in 15 small-scale societies. *American Economic Review*, *91*, 73–78.

Henrich, J., Boyd, R., Bowles, S., Camerer, C., Fehr, E., Gintis, H., ... & Henrich, N. S. (2005). "Economic man" in cross-cultural perspective: Behavioral experiments in 15 small-scale societies. *Behavioral and Brain Sciences*, *28*, 795–815.

Henrich, J. P., Boyd, R., Bowles, S., Fehr, E., Camerer, C., & Gintis, H. (Eds.). (2004). *Foundations of human sociality: Economic experiments and ethnographic evidence from fifteen small-scale societies*. Oxford University Press on Demand.

Hofstede, G. (1991). Empirical models of cultural differences. In N. Bleichrodt & P. J. D. Drenth (Eds.), *Contemporary issues in cross-cultural psychology* (p. 4–20). Swets & Zeitlinger Publishers.

Ishii, K., Mojaverian, T., Masuno, K., & Kim, H. S. (2017). Cultural differences in motivation for seeking social

support and the emotional consequences of receiving support: the role of influence and adjustment goals. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, *48*, 1442–1456.

岩谷舟真・村本由紀子・笠原伊織（2016）評判予測と規範遵守行動の関係：関係流動性に着目して　社会心理学研究，*32*, 104–114.

Kachelmeier, S. J., & Shehata, M. (1997). Internal auditing and voluntary cooperation in firms: A cross-cultural experiment. *Accounting Review*, *72*, 407–431.

Kemmelmeier, M., Jambor, E. E., & Letner, J. (2006). Individualism and good works: Cultural variation in giving and volunteering across the United States. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, *37*, 327–344.

Kim, H. S., Sherman, D. K., Ko, D., & Taylor, S. E. (2006). Pursuit of comfort and pursuit of harmony: Culture, relationships, and social support seeking. *Personality and Social Psychology Bulletin*, *32*, 1595–1607.

Kim, H. S., Sherman, D. K., & Taylor, S. E. (2008). Culture and social support. *American Psychologist*, *63*, 518–526.

Knafo, A., Schwartz, S. H., & Levine, R. V. (2009). Helping strangers is lower in embedded cultures. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, *40*, 875–879.

Leung, K., & Bond, M. H. (1984). The impact of cultural collectivism on reward allocation. *Journal of Personality and Social Psychology*, *47*, 793–804.

Levine, R. V., Norenzayan, A., & Philbrick, K. (2001). Cross-cultural differences in helping strangers. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, *32*, 543–560.

Li, W. Q., Li, L. M. W., & Li, M. (2019). Residential mobility reduces ingroup favouritism in prosocial behaviour. *Asian Journal of Social Psychology*, *22*, 3–17.

MacDonald, K. (1984). An ethological-social learning theory of the development of altruism: Implications for human sociobiology. *Ethology and Sociobiology*, *5*, 97–109.

Markus, H. R., & Kitayama, S. (1991). Culture and the self: Implications for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, *98*, 224–253.

Markus, H. R., & Kitayama, S. (2010). Cultures and selves: A cycle of mutual constitution. *Perspectives on Psychological Science*, *5*, 420–430.

増田貴彦・山岸俊男（2010）文化心理学［上・下］―心がつくる文化，文化がつくる心―　培風館.

松井 洋・中里至正・石井隆之（1998）愛他性の構造に関する国際比較研究：米国，中国，韓国，トルコ，日本の中学・高校生を対象として　社会心理学研究，*13*, 133–142.

McGuire, A. M. (1994). Helping behaviors in the natural environment: Dimensions and correlates of helping. *Personality and Social Psychology Bulletin*, *20*, 45–56.

Mifune, N., Hashimoto, H., & Yamagishi, T. (2010). Altruism toward in-group members as a reputation mechanism. *Evolution and Human Behavior*, *31*, 109–117.

Miller, J. G. (1994). Cultural diversity in the morality of caring: Individually oriented versus duty-based interpersonal moral codes. *Cross-Cultural Research*, *28*, 3–39.

Miller, J. G., Akiyama, H., & Kapadia, S. (2017). Cultural variation in communal versus exchange norms: Implications for social support. *Journal of Personality and Social Psychology*, *113*, 81–94.

Miller, J. G., & Bersoff, D. M. (1998). The role of liking in perceptions of the moral responsibility to help: A cultural perspective. *Journal of Experimental Social Psychology*, *34*, 443–469.

Miller, J. G., Bersoff, D. M., & Harwood, R. L. (1990). Perceptions of social responsibilities in India and in the United States: Moral imperatives or personal decisions? *Journal of Personality and Social Psychology*, *58*, 33–47.

満野史子・三浦香苗（2010）大学生の思いやり行動躊躇と対人関係特性の関連　昭和女子大学生活心理研究所紀要，*12*, 75–85.

Mojaverian, T., & Kim, H. S. (2013). Interpreting a helping hand: Cultural variation in the effectiveness of solicited and unsolicited social support. *Personality and Social Psychology Bulletin*, *39*, 88–99.

Moorman, R. H., & Blakely, G. L. (1995). Individualism-collectivism as an individual difference predictor of organizational citizenship behavior. *Journal of Organizational Behavior*, *16*, 127–142.

Morling, B., Uchida, Y., & Frentrup, S. (2015). Social support in two cultures: Everyday transactions in the US and empathic assurance in Japan. *PLoS One*, *10*, e0127737.

Nadler, A. (2020). *Social Psychology of Helping Relations: Solidarity and Hierarchy*. John Wiley & Sons.

Niiya, Y. (2016). Does a favor request increase liking toward the requester? *The Journal of Social Psychology*, *156*, 211–221.

Niiya, Y., & Ellsworth, P. C. (2012). Acceptability of favor requests in the United States and Japan. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, *43*, 273–285.

Niiya, Y., Ellsworth, P. C., & Yamaguchi, S. (2006). Amae in Japan and the United States: An exploration of a "culturally unique" emotion. *Emotion*, *6*, 279–295.

Niiya, Y., Handron, C., & Markus, H. R. (in prep). A U.S./Japanese comparison of the intent versus the impact of helping others. Unpublished manuscript.

Niiya, Y., & Harihara, M. (2012). Relationship closeness and control as determinants of pleasant amae. *Asian Journal of Social Psychology*, *15*, 189–197.

Oda, R., Niwa, Y., Honma, A., & Hiraishi, K. (2011). An eye-like painting enhances the expectation of a good reputation. *Evolution and Human Behavior*, *32*, 166–171.

岡 檀（2013）生き心地の良い町：この自殺率の低さには理由（わけ）がある　講談社.

Omoto, A. M., Snyder, M., & Hackett, J. D. (2010). Personality and motivational antecedents of activism and civic

engagement. *Journal of Personality*, *78*, 1703–1734.

Oyserman, D., & Lee, S. W. (2008). Does culture influence what and how we think? Effects of priming individualism and collectivism. *Psychological Bulletin*, *134*, 311–342.

Pavey, L., Greitemeyer, T., & Sparks, P. (2012). "I help because I want to, not because you tell me to" empathy increases autonomously motivated helping. *Personality and Social Psychology Bulletin*, *38*, 681–689.

Penner, L. A. (2002). Dispositional and organizational influences on sustained volunteerism: An interactionist perspective. *Journal of Social Issues*, *58*, 447–467.

Preston, S. D., & De Waal, F. B. (2002). Empathy: Its ultimate and proximate bases. *Behavioral and Brain Sciences*, *25*, 1–20.

Riemer, H., Shavitt, S., Koo, M., & Markus, H. R. (2014). Preferences don't have to be personal: Expanding attitude theorizing with a cross-cultural perspective. *Psychological Review*, *121*, 619–648.

Roth, A. E., Prasnikar, V., Okuno-Fujiwara, M., & Zamir, S. (1991). Bargaining and market behavior in Jerusalem, Ljubljana, Pittsburgh, and Tokyo: An experimental study. *The American Economic Review*, 1068–1095.

Smith, P. B. (2015). To lend helping hands: In-group favoritism, uncertainty avoidance, and the national frequency of pro-social behaviors. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, *46*, 759–771.

Taylor, S. E., Sherman, D. K., Kim, H. S., Jarcho, J., Takagi, K., & Dunagan, M. S. (2004). Culture and social support: Who seeks it and why? *Journal of Personality and Social Psychology*, *87*, 354–362.

Taylor, S. E., Welch, W. T., Kim, H. S., & Sherman, D. K. (2007). Cultural differences in the impact of social support on psychological and biological stress responses. *Psychological Science*, *18*, 831–837.

Thompson, P. S., & Bolino, M. C. (2018). Negative beliefs about accepting coworker help: Implications for employee attitudes, job performance, and reputation. *Journal of Applied Psychology*, *103*, 842–866.

Thomson, R., Yuki, M., Talhelm, T., Schug, J., Kito, M., Ayanian, A. H., ... & Ferreira, C. M. (2018). Relational mobility predicts social behaviors in 39 countries and is tied to historical farming and threat. *Proceedings of the National Academy of Sciences*, *115*, 7521–7526.

Triandis, H. C. (1995). *Individualism and collectivism*. Westview Press.

Uchida, Y., Kitayama, S., Mesquita, B., Reyes, J. A. S., & Morling, B. (2008). Is perceived emotional support beneficial? Well-being and health in independent and interdependent cultures. *Personality and Social Psychology Bulletin*, *34*, 741–754.

Utz, S. (2004). Self-construal and cooperation: Is the interdependent self more cooperative than the independent self? *Self and Identity*, *3*, 177–190.

Van Dyne, L., Vandewalle, D., Kostova, T., Latham, M. E., & Cummings, L. L. (2000). Collectivism, propensity to trust and self-esteem as predictors of organizational citizenship in a non-work setting. *Journal of Organizational Behavior*, *21*, 3–23.

Wade-Benzoni, K. A., Okumura, T., Brett, J. M., Moore, D. A., Tenbrunsel, A. E., & Bazerman, M. H. (2002). Cognitions and behavior in asymmetric social dilemmas: A comparison of two cultures. *Journal of Applied Psychology*, *87*, 87–95.

Williamson, T. J., Stanton, A. L., Austin, J. E., Valdimarsdottir, H. B., Wu, L. M., Krull, J. L., & Rini, C. M. (2017). Helping Yourself by Offering Help: Mediators of Expressive Helping in Survivors of Hematopoietic Stem Cell Transplant. *Annals of Behavioral Medicine*, *51*, 683–693.

Wong, R. Y. M., & Hong, Y. Y. (2005). Dynamic influences of culture on cooperation in the prisoner's dilemma. *Psychological Science*, *16*, 429–434.

Yamagishi, T. (1988). The provision of a sanctioning system in the United States and Japan. *Social Psychology Quarterly*, *51*, 265–271.

Yamagishi, T., & Yamagishi, M. (1994). Trust and commitment in the United States and Japan. *Motivation and Emotion*, *18*, 129–166. https://doi.org/10.1007/BF02249397

Yamaguchi, S. (2004). Further clarifications of the concept of amae in relation to dependence and attachment. *Human Development*, *47*, 28–33.

山本翔子・結城雅樹（2019）トロッコ問題への反応の文化差はどこから来るのか？ 関係流動性と評判期待の役割に関する国際比較研究　社会心理学研究，*35*, 61–71.

山村麻予（2013）葛藤場面における「困窮者を援助しない」理由分類の試み：道徳判断水準からの検討 大阪大学教育学年報，*18*, 21–36.

Yuki, M., Maddux, W. W., Brewer, M. B., & Takemura, K. (2005). Cross-cultural differences in relationship- and group-based trust. *Personality and Social Psychology Bulletin*, *31*, 48–62.

Yuki, M., & Schug, J. (2012). Relational mobility: A socioecological approach to personal relationships. In O. Gillath, G. Adams, & A. Kunkel (Eds.), *Decade of Behavior 2000–2010. Relationship Science: Integrating Evolutionary, Neuroscience, and Sociocultural Approaches* (p. 137–151). American Psychological Association.

― 2020. 8. 24　受理 ―